

第一節 共和国の小春日

インディアン・サマー

「ドレドとわたしたちの意見に大きな違いがあり、それが戦争に訴えなければならぬほどの深い淵となつて私たちの間に横たわつてしまつていた事実は認めなければなりません。過去、多くの人々がその貴重な生命と引き替えに証明してきたように、自由を犠牲にした平和というものはあり得ず、そして自由の代償は常に余りにも高価なものであることに議論の余地はありません……」

ル・ラント共和国首都レイヴェルゲン市郊外の国立競技場を埋め尽くした二〇万余りの人々は、登壇した一人の少女の声に息を呑んだ。

小春日和の微風に緩やかに吹きなびかせられた長い黄金色の髪が薄日をきらきらと弾き、この長身の少女が光そのものを纏っているかに見える。

意思的な碧セシイアグリーン 緑の瞳を上げ、少女は響きのいいメゾ・ソプラノの声を競技場の隅々にまで行き渡らせる。数分前まで競技場を満たしていた、奇妙に実質を欠き、白々しさを伴つた歓呼は消え、水を打つたような沈黙が少女の言葉を出迎えた。

「戦いは余りに長く続き、余りに多くの犠牲を払い、余りに多くの憎しみを生み出して来ました。今、こうして母星の地表に集うわたしたちを守るため、かけがえのない肉親……親が、兄弟が、姉妹が、夫が、妻が、そして子供たちが、はるか数千光年の彼方で戦い、生

命を落とし続けているのです。

戦いも、犠牲も、憎しみももう十分です。戦いを止め、お互いの存在を認め、お互いが共存し合える場を探り始めても、生命を失つた人々への背信にはなりはしないのです……」

「今すぐに、お互いの立場の違い、積み重ねすぎた憎しみを乗り越えられないとしても、少なくとも色々な価値観を持つた人々が共存することを認めるような世界を作る努力は始めることはできます。私たちはこの母星から生まれ、母星から旅立ち、母星を中心とした共和国圏をみずからの共通のふるさととして仰いでいるのです。戦いによらなくても、わたしたちはいずれ死んでいく身であるのに、敢えて互いを憎み合い、殺し合う必要などないのですから……」

昔のことわざにもあります。どのような長い旅もまず最初の一步を踏み出さなければ始まらない、と。これまでと全く異なる道に最初の一步を踏み込むのは、これまで歩んできた道を歩み続けるよりも、もと来た道がどれほど苦しいものだったとしても、恐ろしいほどの勇氣と努力が必要です。でも、その勇氣と努力がなければ、わたしたちは恐怖と暴力と死から永久に逃れることはできないのです。長い戦いを戦い、屈しない私たちであれば、平和への新たな、そして長く遠い旅立ちに一步を印すだけの勇氣を奮うことが不可能なわけはありません。勇氣を奮い、新たな一步を踏み出そうではありませんか……」

「わたしの弟も、ロメイチェフ提督の艦隊に属して戦つてくれていきます。後方の安全な場所です、弟の無事をただ祈ること……それ以外にわたしは何かができるはずだし、何かをしなければならぬ。わたしはそう信じます。」

“人類が知り得た最高最善の叡知は、自由と存在はそれを日々新たに勝ち取る者のみが受けるに値するということを知ったことにある”、そして“いかなる神のみわざも、わたしたち自身の手でなされなければ、この世のものとしてあることはできない”のです。今、自らができると思うことをなさなければ、わたしは自身良心が、安らかな眠りを永遠に許さなくなるでしょう。今を変え、良心のやすらぎという報酬を得るために、今、ここで第一歩を踏み出すべきなのです”

ル・ヨント共和国暦七二三年一月一日。

アップになった画面の中で、頬を真っ赤に染め、軽く肩で息をついていたのは緊張のせいだったのかも知れない。“ワルステート殲滅戦”戦勝祝賀会で生まれて初めて数万の聴衆の前に立つ経験をしたとき、アリシア・ミュッケルはまだ一七歳だった。

『もしこの祝賀会で“学徒兵代表”なる立場を与えられていなければ、アリシア・ミュッケル氏が議会の一角を占めるということにはなかつたかも知れません。皮肉な言い方かも知れませんが、政府与党は好んでもっとも手強い政敵に、政界への登場の機会を与えてしまったとも言えるのではないのでしょうか』

アリシアの表情が、退屈そうな表情の中年男性に切り替わったので、思わず上体を軽くのけぞらせたマールクは舌打ちする。

『そうとも言えますが、しかし、どのような意見を持ち、たとえ反政府、反国家的な思想の持ち主といえども、意見を表明し権利を主張することが許される。これが民主国家の本質的な危険性でもあるわけです』

嫌みなほどこでつぶりと太り、頭から油でもかぶったのではない

かと思えるほどに顔中をてらてらと光らせた初老の男が応じる。マールクは名前を知らないが、高名な“政治評論家”という種類の人間であるらしかった。

「お時間です、閣下」

3DTVのスイッチを叩き切り、ソファに腰掛けたままものぐさそうに背伸びなどをしているマールクに、背中から声がかげられた。「どうしてもでなきゃダメかな」

「好ましくありません」

クリース・ローク少佐は落ち着いた口調で応じる。“断るのは”、というフレーズを省略するのは、生来の口数の少なさのゆえ。

彼女自身は二〇代の前半にさしかかったばかり。戦艦『クレストルランス』の通信主任士官から司令長官副官に転じた。副官としての事務処理能力のみならず、射撃や格闘術にも長じた生粋の宇宙軍士官である。

「正論……」

些かうつろいした表情で、若い元帥は顎の辺りを撫でまわした。

冴えた容顔の持ち主ではない。整っているとせば、そう言えないこともない。瞳は濃い灰色で、緩いウエーブのかかった茶褐色の髪は少々納まり悪く軍帽をはみ出している。上背もある方ではなく、中肉中背よりも少し高いか、といった程度。少なくとも、マールクの今日の声望は、彼の容顔のしからしむるところでないことだけは、衆目の一致するところだった。

共和国にとって開戦一年目の七二〇年。“ユラフ会戦”での“局地的な”敗北を除けば圧倒的な優勢下に暮れ、共和国圏はなんとはい

ない戦勝ムードの中にあつた。七二年の半ばには上下院を含めた総選挙が予定されていることもあり、ヒューレット・ザークを首班とする共和国政府は、ドレド戦役戦勝記念を兼ねて祝勝式典を催すことを決めていた。年々、統制の厳しくなる食料品も、一〇月から翌年一月にかけては大幅に規制を緩めるとも伝えられていた。

「やれやれ……風邪ひいたとか何とか口実、つけられんもんかなあ」

「好ましくありません」

普通の士官なら、駄々っ子のようなマールクの言い方に微かでも苛立ちか、それとも面白そうな口調が混じりそうなものだが、クリースの場合は完全に最初と同じ調子。“断るのは”を省略するのまで同じだった。

「かならず司令長官御自身で、この指定です」

「退路なし、か」

しようがないか、とマールクはため息をつく。

式典をやるな、などというつもりはない。しかし、余りにも見え見えな政府の意図に利用されるのを嫌ったのが、彼の潔癖さだったのかも知れない。

……選挙なら勝てるだろうに、今のままで。

共和国にも幾つかの政党があるが、唯一の例外を除いてはいずれも戦争継続を叫んで、しかも他の政党よりも更に強硬な対連邦外交を唱えることで人気を得、議席を伸ばそうとしているのだ。

マールクの本音は、アリシア・ミュッケルを中心とした議員グループにできるだけ議席を得て欲しかった。連邦の圧倒的な国力を

正確に把握し、長期戦の不利を説くアリシア達を支持する声は決して多くはない。数千の恒星系に勢力圏を広げ、数百の有人惑星から構成される人口三〇〇億の恒星系間連邦、と言われても、その巨大さを直感できる人間は少ないのだろう。

……政府もなあ……

参謀総長ドロク元帥の傲慢そのものの表情や、禿豚閣下ことワシエック参謀次長を思い出しただけでも、彼は鳥肌たちそんな錯覚を覚える。まして、彼らの主催する狂信的な軍事ヒロイズムの式典に参加するなど、気遣い沙汰ではないか。

馬鹿げた話だ。やはり、無理にでも辞めておくんだつたな、とマールクは浮かぬ表情で呟く。戦役後、マールクは大将にまで昇進していたが、ドレド降伏の一〇日後、辞表を政府に提出したのだ。

が、辞表を出しにいった彼に手渡されたのは、元帥号と艦隊最高司令長官の辞令。

「もう、戦いは終わったんです。私はもともと軍人じゃありません。軍に留まる意味はないと思います」

抗議は受け入れては貰えなかった。閣議の決定であること、共和国市民の大半がそれを望んでいること、また艦隊の将兵もマールク以外の人物を司令官に戴くことを望んでいないことなど、など。

憮然とする彼に謎ときをしてくれたのが、当時上院議員に選出されたばかりのアリシア・ミュッケルだった。

一日、マールクとネイをシェールキッヒの自宅に招いたアリシアは、マールクの疑問にこともなげに答えたものだった。

「あなたが怖いのです、政治家や役人たちは……」

「怖い、ですか、私が？」

「啞然として、マールクはティー・カップをもった手を空中で停止させたものだ。」

「あなた自身は、お気づきではないでしょうかね」

「いい気になってクーデターでも起こすだろう、とでも？ おかしいな、それなら辞めさせて軍から引き離しておいた方が無難だろうに」

「そうじゃありません、提督。彼らが恐れているのは、あなたが軍を退き、その声望を担って政界に進出することです」

「成程、政界にね……」

「言ってから、その意味に気づいたマールクは、二度呆気にとられてアリシアを見凝めたものである。」

アリシアは苦笑した。

「お分かりになりませんか？ 救国の英雄としてのあなたの名声がどれほど高いものであるか、ということに」

「考えたこともありませんでした」

アリシアに対しては、本心を隠す必要を認めない。

「あなたに政治権力への野望はない……わたしには分かりますけれど、今の共和国政府の中にそのことを理解できる人がどれほどいるでしょうかしら。」

彼らにしてみれば、あなたが軍をお辞めになるのはよいとしても、そのあとが怖い、というわけなんです。あなたが、いくら権力などに執着はない、とおっしゃっても誰も信じないでしょう。彼らの多くの第一義は権力の獲得と維持です。彼らは、それ以外の価値観を

持つ人間が存在するなど、夢にも考えてはいないんです。

それに官僚たちは、政治家たちが今と同じで無気力で無能力であった方がいろいろ都合がいいですものね。マールク艦隊のように、変にきばきとよく働く人たちが自分たちの縄張りに入ってきたら、あつと言つ間に自分たちの仕事を奪られてしまう……そんな風に考えているのかも知れません」

厄介なことだ、とマールクは頭を掻くしかなかった。いきなり戦場に引つ張り出され、生き延びようとして必死で戦った結果が“救国の英雄”である。紙切れ一枚で徴兵した大学生が、あれよあれよと言つ間にドレドを破ってしまったからといって、今度は自分達の権力が脅かされるのではないかと警戒するとは大したものだ。被害妄想もここまでくると立派としか言いようがあるまい。

「……ネイが言っていました。提督が、愚痴をこぼされる相手は、私たち姉弟しかありませんよ。と……光栄ですわ、常勝提督の愚痴など、なかなか聞けませんものね。あなたが補欠だとしたら、わたしたちは補欠のそのまた補欠でしょう」

式典の前日に会ったときに、アリシアがそう言っていたのを、マールクは改めて思い出す。

作戦開始直前という微妙すぎる時期に、最前線の艦隊根拠地を空けて母星へ戻ってきたマールクの目的の一つがアリシアに会うことだった。

「二年以内に戦争を止めないと、ル・ヨントは滅ぶ、と？」

「連邦にはつきり負けましたと手を上げさせる見込みがあればともかく……完勝が望めぬ以上、打つ手は限られてきますね。ル・ヨントを滅ぼしてしまわないための手は……」

見ようによっては大変な裏切り行為を依頼することになる……
マールクがためらった理由がそれだった。国家……と言つよりも、
政府組織を至上のものと考え、政府組織を維持継続するためになら、
共和国の市民の最後の一人までが死に絶えてもいいと考える人々に
とつて、マールクがアリシアに依頼しようとし、そして実際に依頼
した内容は重大な反逆であり、裏切り行為に違いない。

「連邦を分裂させる……これは分かります。強すぎる敵ですものね。
分裂させて、弱い方を味方に付けるのでしょうか？」

「このやり方の弱いところは、むしろ味方にあるんですよ。」

内部での分裂が進行して外敵と戦い得なくなつた連邦が和を求め
てきたとして、それに応じられる態勢が共和国側にあるのか……
マールクの言葉は、聡明すぎるほど聡明なアリシアをさえ沈黙させ
るに十分だった。

マールクは続けた。

「……そこで、艦隊を動かす必要があります。」

「……」

「艦隊を動かし、連邦圏の辺境で巨大な軍事衝突を起こします。今
回は大いに勝てると思えません。」

多分、莫大な流血を見ないでは終わらない……数十万どころか、
数百万もの大量殺人を、マールクたちは指揮しなければならぬの
だ。共和国の若者一〇〇万人を死なせることで、連邦も一〇〇万人
以上の犠牲者を強制される。一〇〇万人余りの死者とその家族の嘆
きと怒りは、ル・ラントばかりではなく、彼らに犠牲を強要し続け
る連邦へも向けられよう。

マールクの言葉には明敏な反応を欠かさないアリシアが、この時

は沈黙を先行させる。サファイア・グリーンの眸が、マールクの言
葉への非難を浮かべて僅かに翳つた、と思つたのはマールク自身が
懐いている怯みの裏返しだったのかも知れないが……アリシアも
マールクも、“一〇〇万の死者”を“単なる帳簿上の数字”として
片づけてしまう高級官僚が特有の“感性の磨滅”からは完全に無縁
だった。彼らは責任をとらねばならず、それが容易なことではない
ことを事実として感じて背に冷たいものを感じずにはいらなかつ
たのだ。マールクは一〇〇万の死者を生み出してしまふことに、ア
リシアは一〇〇万の死を無為のものとして風化させてしまわな
いこと。

咳払いして、咽喉に絡まってきたいがらっぽいものを切り、マ
ールクは言葉を続けた。

「連邦を二分させるだけではなく、三分、できれば四分させます。
そして……」

「分かりました、マールク提督。」

形のいい眉をひそめて暫く考え込んだ後、アリシアはマールクの
意図を理解したことを言葉に表してくれた。

「提督は、私には重過ぎる課題を与えられたようですよ……いいえ、
逃げ口上で言うものではありません……それができるのなら、こうし
て手をこまねいてはいけません……でも、分かりました、
提督。御希望に完全に沿えるかどうか分かりませんが、微力を
尽くすことだけはお約束します。」

マールクは、現実の問題に立ち返つた。

「分かったよ、出かけることにするか」

立ち上がり、ついてもいない埃を払った軍帽を頭の上に載せながら、マールクはひとりこちる。

「ま、座って居眠りでもすれば時間は過ぎるからね。会戦の指揮を執るよりかはずっと楽だろうさ」

共和国首都レイヴェルゲンは惑星ル・ラントの中緯度地帯に位置し、ドレド戦役までは海岸に沿って帯状に広がる美しい都市だった。それが、ドレド艦隊の上空襲によって完全に破壊され、戦後復興されたものの、マールクの好みにはおおよそ適わない都市に変貌してしまっていた。

市街の中央に、これ見よがしにそびえたつ参謀本部と軍務省の巨大なビルディング。それを囲む一帯には“英雄の丘”なる名称が与えられ、その中には“救国の英雄”達の銅像と、二〇万人を収容できる大スタジアム“トーク記念広場”。街は、まるで参謀本部ビルにつかえるかのように、この“英雄の丘”を中心にした同心円状の都市設計にしたがって再建され、しかも参謀本部ビルよりも背の高い建築物は不文律によって禁じられる、という状態だったのである。

子供向けの3DTVでよくやっているような“残忍な宇宙の独裁者”から“宇宙の平和と正義を守るために”戦った、とかいうのなら“英雄の丘”も“救国の英雄”も結構だろうが……

ドレド戦役自体が共和国圏の内戦であり、つまるところは共和国圏の覇権を賭けて共和国母星とドレドとが争った内輪もめに過ぎないではないか。それも共和国政府の失政さえなければ、なくてはすんだかもしれない。そんな戦争に勝ったからといって得意になつて英

雄だのなんだのといっている連中の精神構造を、マールクは常々疑っていた。

それにトーク記念広場、とはまた……

ヴィレックス・トーク参謀大将。ドレド戦役当時の参謀総長。本国艦隊司令官ローク中将の功を奪おうと政府を脅迫して彼を解任し、取つて代つたまではよかったが、ものの見事にドレド艦隊の農にはめられて本国艦隊をむざと全滅させた男。

しかし、政府と参謀本部は、責任をトーク中将の“消極戦術”に転嫁して中将を処刑する一方、トーク大将の階級を元帥にすすめて“悲劇の英雄”に祭り上げたのだ。

“悲劇の名将”ヴィレックス・トーク“元帥”の銅像に並んで立つ自分自身の銅像の脇を、肩を竦めたい思いで通り過ぎたマールクは、ローク少佐が手に入れてきてくれた色の濃いサン・グラスを取りだした。さて、忍耐力のテストにでかけるとするか、と内心に呟くと“トーク記念広場”のメイン・スタンドに設けられた貴賓席に足を向けた。

予想通り、式典は狂騒的な軍事ヒロイズムの展覧会だった。

「……我が忠良なるル・ラント共和国市民諸君、いまこそ起て、起ち上がれ、今こそ起つて、この銀河を支配する邪悪な暴力を打倒せよ。我がル・ラントの、自由と平和、そして正義の伝統を、シエル・メス連邦の悪虐な暴力の前に放棄してはならないのだ」

「……！」

居眠っていたマールクは、甲高い絶叫に束の間の休息からひきずりだされた。嫌々目を開き、雄弁を揮うデスタリヴァ・ドロク元帥の“雄姿”を觀賞することにする。

「……今、諸君の享受する自由、そして平和もまた、代償なくして得られたものではない。我々は、そのことを知っている。我々の多くの同胞が戦い、流した尊い血の上に、我らの今があることに、今こそ思いを致そうではないか。いざ、いざ、戦わん、宇宙の自由と平和のために。永遠なれ、ル・ラント、共和国万歳！」

「なあにをいつてやがる……」

熱狂的な参謀総長閣下の煽動演説を横目に聞き流すマールクは、白けた口調で呟く。

飛び交うビームとミサイル。瞬時に破壊される戦艦の放つ純白の閃光。数十万人単位での巨大な殺人作業が容赦なく進行し、マールクから前線將兵達が一瞬後の死に怯え、満足な食事すら摂れずに戦わされていた頃、腹心たちとともに最上級のワインを楽しみ、最高級の料理に飽食していたのはドロクから参謀本部の幹部達ではないか。

しかし、観衆の多くはドロク元帥の演説に熱狂し、ある者は立ち上がって叫び、またある者は天に向かって拳を振り上げる。

マールクにとつて不愉快極まりない式典は三時間以上も続き、戦場では不屈の粘りを発揮する彼も、式次第一切が終了した時は大会戦を戦い抜いた時のように疲れ果てていた。

「お疲れのようですね、マールク提督」

会場を出た所で声をかけられ、声の主を求めて振り返ったマールクは、アリシア・ミュッケルがにこやかな、そして少し面白がっているような表情で佇んでいるのを視界に入れた。

「ああ、どうも……」

式典の毒気にあてられた思いだったマールクは、アリシアの柔かな微笑に救われた気がしてほっと溜息をつく。

「別に疲れてるわけでもないんですよ。ずっと居眠りしてたもんだから、すっかり寝呆けてしまつて……」

アリシアは、弟のそれよりも色の濃い、碧みの強いグリーンの瞳をいたずらっぽくくりとさせる。

「ネイは要塞要塞ですね」

「ええ、いつシエルメスの反撃があるかも分からない状態ですからね。わたしなどいなくても構いませんが、彼がいなくなると、いざというときにことですからね」

「謙遜なさるんですね、ネイではあなたの代わりにはならないことくらい、私にでも分かることですね、提督」

微笑がまばゆいほどの鮮やかな印象を残す。

「提督も直ぐに要塞へ？」

「ええ」

言い差し、マールクはちょっと口ごもる。美貌の上院議員と“常勝提督”の立ち話が周囲の注意を惹かないはずはなかった。実際、すでに何人かの議員や高級士官が立ち止まり、マールクにはおざりな、アリシアには露骨なほどの無遠慮な視線を注ぎ込んでくる。

ローク少佐は二人からは二、三步下がりがり、目立たぬように佇んでいるが、右手は上着のポケットに滑り込んでいる。それとは見えぬほど静かな動きで彼女が身体を移動させると、視線を遮られた何人が舌打ちしてその場を離れる。

アリシアは、彼のかたわらに立つ、姿勢のよい女性士官に視線を送った。士官学校をトップクラスの成績で卒業しただけあって、ローク少佐はマールクなどよりも遥かに軍人らしい。

あるとき、第五艦隊を指揮するセルティ・マックス中将が副司令官のマクシミリアン・グラーフ准将に語った逸話がある。

ドライバオム要塞に配属になったばかりの新兵が、ローク少佐を伴ったマールクに出会ったときに何とも妙な表情になり、それからローク少佐に向かつて敬礼した、というのである。マールクは肩を竦めて通り過ぎ、もともと極端に寡黙なクリースもその新兵の勘違い(?)を修正することなく立ち去ってしまったので、その新兵はあとで上官から散々に叱責される羽目になった、という。

「……中佐と、その従卒に見えたんだろうさ」

マックスはそう締め括ったが、尤も逸話が真実であるという証拠は何もない。

「クリース・ローク中佐。副官を勤めてもらっています。ネイが推薦してくれました」

「……ローク？」

問う視線に、クリースが微かに顎を引く動作で肯定を示す。強い光をまとったサファイア・グリーン^①の視線を、無表情な琥珀色の眸が受けとめ、一瞬の数分の一だけ固定した。

「クリース・ローク中佐です、ミュッケル議員」

鮮やかな敬礼。一旦下げられた右手が指し示した先に、政府からマールクに差し回された地上車があった。

クリースの意図を察したらしく、アリシアは謝絶を示してかぶりを振って見せた。

「宇宙港とは逆方向になりますから……マールク提督には一刻も早く要塞ようさいに帰っていただかないと。提督が早く帰られれば帰られるほ

ど、共和国の市民にはよいことになるんですからね」

近い内にまた会えるといいですね……交わされた言葉はさりげなく、握手はさらにさりげなかった。

マールクが、再度の連邦圏侵攻のための作戦計画に着手したのは共和国暦七二〇年五月。“ユラフ宙域会戦”の後、辛うじて連邦圏からの脱出に成功したベイ・ドレンス中将麾下の艦隊がドライバオム宇宙要塞に帰還して間もなくのことである。

マールク艦隊を代表する“七提督”と、その副司令官、参謀たちまでを交えた最初のディスカッションが行われたのは戦艦『ドレスト』号の中央作戦会議室。五月一〇日のことである。

最初に発言を求めたのはベイ・ドレンス中将である。

「一〇〇隻の艦艇を失った責任のがれをするわけではないが、アルヴェスタの時に比べて、連邦空軍の兵力が充実してきたこと、これは警戒すべき要素だ」

「警戒すべき要素であることは確かだが、会戦すれば連邦が加速度的に兵力の充実を図ってくるだろうこと、これは大前提だった。違うかね、ベイ」

「よろしいか？」

「いいよ、ヒース」

「兵力については元帥の言われる通りだが、おれは連邦空軍の指揮能力の向上をより警戒すべきだと思う」

「それは言える」

ローナクの発言をドレソンは肯定する。

「アルヴェスタやマリューバー時よりも、ユラフで戦った連邦空軍艦隊の動きが格段によく なっている。これも実感として感じた」

「これだけ短期間にこれだけ指揮運用能力が向上するものかな？単にわれわれの戦い方が馴れられてしまった、ということではないですか？」

「たかが二度や三度で馴れられてしまうくらいなら、おれたちは“ドライバオム”からでも帰ってはこれなかつたはずだぞ、セルティ。それに、少なくともまだパタンにはまったような戦い方はしていないというのが、おれの意見だ」

唸り、ローナクは視線を転じる。

「で、ネイ、何か意見はないのか」

指名され、柔らかな色調の金髪の青年は穏やかな微笑で応える。

「ハードウェアの整備とソフトウェアの充実、ですね」

「ハードウェア？」

「ハードウェア面は、例の『シグナ・フォース』級戦艦でしょう。

あの艦の同型艦が加わることで艦隊の指揮運用機能が格段に向上した……それから……」

青年……ネイス・ミュッケル中将は、居並んだ同僚たちを指し示す。

「ソフト面は指揮系統が整理されて上級司令部の指示が徹底するようになった。あとはよい指揮官なり、参謀長なりが上級司令部に入ったということではないでしょうか。未確認の情報ですが、連邦は『シグナ・フォース』級の戦艦をもつ八隻建造中だとのことですよ。」

兵力、個艦の性能、それから指揮能力でも、連邦空軍は確実に私たちに肩を並べつつある、ということになります……」

「……といって、兵力で圧倒するには彼我の国力差が大きすぎます」

ラングが、ちよつと冷ややかすぎるほどの口調で指摘する。

「マルクは、それが癖の肩を竦める仕草で応じた。」

「連邦空軍艦隊の制式艦隊群と正面から戦って決定的に撃破する戦略は、もう限界だと言つことだね。まあ、ヘルム、というかヴィルフを奪る作戦自体が、連邦空軍艦隊との艦隊決戦を求めるものじゃない……逆に言えば、艦隊戦闘で負けてもヴィルフを確保できればいい」

「しかし、閣下、補充能力は連邦の方が遥かに上回ります。ヴィルフで消耗戦を繰り広げている内に、連邦の方が早く、艦隊兵力を回復するではありませんか？」

生真面目な口調で問いかけてくるリューフレット・バイク少将に、マルクは軽く頷く。頷き、彼は無造作な調子で回答をテーブルの上に放り投げた。

「うん。でも、第一次会戦から二、三カ月もしたら連邦空軍はわたしたちと戦争するどころじゃなくなるはずだ。それで、ヴィルフ星系はわたしたちの確保するところとなる。これで回答になっているかな？」

ネイス・ミュッケルは多忙だった。

「政府は作戦計画を知らないのか！ 総出動直前の艦隊から、司令長官を母星へ呼び戻してどうするんだ」

政府嫌いのドレスンが激昂するのをよそに、ミュッケルは、ウィルワ恒星系方面への総出動作戦準備を進めているのだ。

「もつとも……」

口が悪いのは第二艦隊司令官のヒースクリフ・ローナクである。

「長官がいたって準備が進むってわけでもないがね」

口の悪いローナクだが、事実を反する言葉を口にしたわけではない。

兵站線の整備、艦隊の再編と増強、またドライバオム宙域自体の警備強化など、やるべきことは無数にあった。大局を見て手際よく艦隊の組織を動かしていくミュッケルと、細部の事務作業を受け持つクリス・ローク司令長官副官の存在がなければ、四万隻をはるかに上回る艦艇と、七〇〇万人以上の前線将兵、二〇〇万近い後方担当の兵員の参加する大作戦実施の可能性など、絶望の水平線のはるか彼方に埋没してしまっていたに違いないのだ。

特にシエルメス連邦空軍が量産を開始したと伝えられる『シグナ・フォース』級、および『シグナス』級の超ド級戦艦に対抗する艦種として、『ドレスト』級戦艦の拡大改良型『ジェレスエン』級の建造と訓練が、それこそ戦場のような激しきで続けられていた。

『ジェレスエン』級の建造について、マールクは説明している。

「連邦空軍がどかん、どかんとヘビー級のパンチを繰り出してくるのをかいくぐって、フットワークを効かしたジャブとショートフックの連射をたたき込む……そういうことかな」

この当時、ドライバオムでは“五万隻、一〇〇〇万人態勢”という言葉が囁かれていた。連邦空軍には遠くおよばないにしても、宇宙軍工廠はフル回転を続けていた。共和国史上空前の大宇宙艦隊を現出させようとしていたのである。そして、新たに召集された新兵たちへの常軌を逸したほどの烈しい訓練も。

こんなことをして何になるのだ、とはミュッケルは口に出しては言わなかった。彼は母星と、そして植民惑星ドレドから続々と送られてくる若者たちの姿を目にし、容易ならぬ精神的な苦痛を味わっていた。十年前の彼ら自身と同様、“国家という至上の存在”とやらを守る為に、何千万もの青年が人生の軌跡を無理矢理に捻じ曲げられるのは、正直に言って正視に耐えなかった。

口にごそしなかつたとはいえ、多くの若者を無為に、全く無為に死に追いやることを意味する作業が苦痛を伴うことに何の変化もありはしない。その痛みが、ときとしてこの温和な青年の自製のレベルをすら凌駕してしまうことも、まれではあるがあつたのである。愛国者を装って自らの安全と権力を、他の大多数の犠牲によって確保できる高級職業軍人のみが、この作業に苦痛どころか喜びを覚えるのだろうか。

そして、大量の戦闘艦艇建造が、すでに大きく傾きかかっている共和国の経済に与える破滅的な影響のことも、ミュッケルは姉からの書簡で知り得る立場にあつた。

“恒星系間輸送船ばかりか、惑星系間輸送船の船体が不足しています。戦艦を建造するためにドックが塞がっていて、新しい船が造れませぬ。現役の船も、整備のためのドックを戦艦に奪われてしまっている上に、交換用の部品も、整備のための工具も、ベテランの船員も不足して来ていて、事故の発生率がものすごい勢いで上がってきてい

ます。このままあと二年間戦争を続けたら、母星は工場を動かす原材料も動力も、そこで働く人々も失って死の惑星になってしまします。「冗談ではなく……」

第四艦隊を指揮するラング中将が新兵の訓練状況を報告しに来たとき、ミュッケルは珍しくも苛立った様子で、練度の向上に不満を示した。

「速成訓練です、何年もかけて気長に訓練していくわけにはいかないとありますが」

「時間がないのはわかっています。ですが、ファートウリック、もう少し練度を上げないと、むざと死なせるようなはめにもなりかねないではありませんか」

「それは承知しております、ミュッケル提督」

冷徹な指揮官として知られるラングは、穏やかだが、しかし辛辣に応じざるを得なかった。

「お言葉ではありませんが、ある意味ではしかたがない、と申し上げるしかないでしょう。時間的余裕はありません。なれば、いかに有効に彼らを死なせるかを考えるのが我々指揮官の任務ということになるかと考えます」

色白なミュッケルの頬にかつと血の気がさした。

「……成程、そうなる、のかもしれないね」

傍目にもそれとわかる努力の末、ミュッケルは平静な口調で頷いた。

「できることなら有効に殺すのではなく、生かすことを考えたいのですが……」

ほとんど口の中の呟きとなった、その言葉をラングは耳にしてはいたが、敢えて無視することに決め、ミュッケルの前を下がった。

「難しい戦になるぞ、今度のは」

ラングが、友人のヤンデキフィティ中将と夕食を共にしながら洩らした述懐がそれだった。

「知れたことさ、連邦空軍は強敵だ。ドレドどころじゃない」

近接格闘戦集団を率いる剽悍な提督はあっさり断定する。彼らは、首将マールクと副司令長官たるミュッケルの軍事的天才を知っている。彼らに対する敬意を隠す必要を認めなかった。

それだけに、そのミュッケルをすら苛立たせるほどの連邦空軍が容易の敵でないことに、彼らは素直な首肯を与えるのだ。

「“アルヴェスタ会戦”を見る」

ヤンデキフィティは言う。二倍の敵に包囲されかかっている状況で、あれ程までに冷静に敵状を読み、対応できる指揮官が共和国艦隊に何人いるか。

「二人……だ」

ワインを一口すすったラングが、こともなげに断定する。

「わたし達では無理だ」

ヤンデキフィティもラングの呟きを肯定する。味気のない野戦口糧の夕食に向かって低く毒づき、グラスのワインをいとしげに揺らめかせる。「アルヴェスタ会戦」に先立つ「ネフェルト宙域の遭遇戦」での戦利品。連邦の言語を解する者ならば、ラベルに連邦の植

民惑星カルシユの名を見出しただろう。

「小瓶でなけりやな、言つことはないんだが」

ラングは苦笑で応える。

「警沢を言うものではない、メル。ワインにありつけただけでも感謝するべきだ。尤も、感謝する相手は連邦空軍の後方勤務本部だが……」

「司令長官と副司令官が野暮天だと、これだから困る」

本心ではない。

連邦空軍は艦艇にワインを載せるほどの余裕があるのに、共和国宇宙軍は食糧すら戦利品に頼らなければならぬありさまだ。

これで勝てるのか……

ラングとヤンデキフィティは、互いに見交わした友人の目が己れと同じことを問いかけているのに気づき、改めて自分が得られる筈のない解答を求めていたことに思い至るのだ。

「まあ、そういうことだ。あのミュッケル中将でさえ警戒するような敵も、確かにこの宇宙には存在するといふわけだ」

細面で長身、鋭い鉄色の目の青年提督は結論を出すように、やや酔いの回った口調で言い切る。メル・ヤンデキフィティ、この年で二三歳。ドレド戦役当時には未だ二〇代の声すら聞いていない志願兵出身の下士官に過ぎなかったが、近接格闘戦の指揮に比類ない勇猛さを示した。

“メーレン会戦”で、乗艦の駆逐艦『ヴェルゲデュレイト』が大損害を受け、士官総てが死傷した後、艦の指揮を引き継いで窮地を脱したばかりか、ドレド艦隊の半数を指揮していた戦艦『レクセ

ル』を撃破、会戦の勝因を作った。

ラングが艦載機集団を率いて戦い、ドレド艦載機部隊の反撃を撃破したのも同じ“メーレン会戦”である。

ドレド主力艦隊との大会戦を不可避の未来に控えていたマールクとミュッケルにとって有能な前線指揮官は得難いものであった。二人の戦果は直ちにマールクの許へ、更にロメイチエフ提督の許へ報告されることになり、間もなく二人は旗艦『クレストルランス』への出頭命令を受け取った。

何事かと不安を隠し切れなかった二人の若者に、ロメイチエフは無造作に『一個戦隊、お前らに預けることにした。好きに使え』と告げ、逆の意味でふたりを呆然自失させたのだった。

膨大な戦闘詳報の中から二人の名を見出し、戦隊指揮官への抜擢を進言したのがネイス・ミュッケルであり、彼の判断の確かさを保証したのがマールクであることを、二人は後日知ることになる。

無名の立場から指揮官に抜擢されたことについては、彼らは素直にマールクとミュッケルの人物眼の確かさを賞賛する心づもりにはなる。

しかし、こと志に反して高級軍人としての人生を強要される羽目になった二人は、その意味に於いてはマールク達の判断を恨めしく思うこともなしとはしなかつたのである。

シエルメス連邦圏への再度の侵攻のためにマールク艦隊がドライバオム宇宙要塞を発したのは共和国暦七二一年四月二三日。まず、レイトウラント・シャブリ中将の第六艦隊三〇〇〇隻が大規模な輸

送船団を伴って出港し、続いてマックス、ヤンデキフィティの第五、第七艦隊を合わせた約五〇〇〇の艦隊がこれに続く。そして二四日には残りの四個艦隊が二群となり、一群はマイルク直率、他の一群をヒースクリフ・ローナク中將が率いてドライバオム要塞宇宙港を発したのである。作戦発令時の公式発表では、動員兵力は約二万九〇〇〇隻、参加兵員五〇四万八〇〇〇人と称された。

このわずか二〇日足らず前の連邦曆五七〇年一四月五日（共和国曆七二一年四月五日）、連邦圏ではメルティア王国がシエルメス連邦に無条件降伏を申し入れている。ル・ヨント共和国宇宙軍史上最大規模の艦隊動員は、“第二次メルティア紛争”直後の連邦圏、それも軍事的な空白地帯となったヴィルワ・シュネーゼル星系を指向したものだ。